

『落葉集』『色葉字集』定訓についての再検討

—「いろは韻」の『広益以呂波雑韻刊誤』との比較を中心に—

王 子妍

1. はじめに

本稿は1598年に刊行されたキリシタン版漢字辞書『落葉集』『色葉字集』の掲載和訓について、「いろは韻」の一種である寛文10年（1670年）刊『広益以呂波雑韻刊誤』と比較し、定訓論を再検討したものである。

「本篇」「色葉字集」「小玉篇」の3部から構成される『落葉集』は、掲載漢字の左右傍訓の位置に現れる和訓が当時の常用性の高い和訓であり、その漢字の定訓であるとされてきた。

ここでは、まず定訓論とは何かを説明しておく。定訓は山田（1971:4-5）によって提起された概念であり、漢字から直ちに喚起される字訓である。具体的には以下の通り定義されている。

某一字について、その呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓を、先づ第一にその字の定訓（またはその一つ）に擬することが許されるであらうと考へる。（中略）その字を指し示すに援用できて、十分その機能が認められるレベルに達してゐる語を、その字の定訓といふことができよう。

山田（1971）は『落葉集』を対象として厳密な調査を行い、例外も存在するものの、基本的に「本篇」の左傍訓と「小玉篇」の左傍訓は定訓を共通に持つことを指摘している¹。豊島（2002）は、後期キリシタン文献『ぎやどぺかどる』の漢字表記をもとに、『落葉集』における漢字と和訓の関係を検討し、『落葉集』における漢字と傍訓は「漢字→和訓」「和訓→漢字」の双方向に規範的に対応付けされとした。また、白井・陳（2024）は「和訓→漢字」の方向についてさらに踏み込んだ研究を行い、キリシタン版『太平記拔書』から「小玉篇」の定訓の常用性を検討した。その結果、「小玉篇」の漢字の左傍訓は文献の用例においても優先的な和訓であり、定訓として扱って差し支えないことを明らかにした。

しかし、「色葉字集」の右傍訓について、「小玉篇」の左傍訓との間に多く同一のものが採られるという傾向は山田（1971）によって予見されたが、当該論文においてはそれが定訓かどうかの検証は行われていない。今野（2016）はそれを踏ま

¹ 山田俊雄（1971）「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料として」『成城国文学論集』4、成城大学大学院文学研究科

え、「色葉字集」の複数定訓掲出から定訓の双方向性は単純な「1:1」²ではなく、「1漢字:多和訓」の多訓字や「1和訓:多漢字」の同訓異字³も存在することを示し、「色葉字集」には複数定訓が存在することを主張している。白井・陳(2024)もそのことについて、「色葉字集」は漢字をどのように読むかを示す漢字辞書「小玉篇」の基盤となった情報に基づき、その漢字と和訓の関係を逆転させたものであり、キリシタン版『太平記抜書』など当代の和語の漢字表記としては不自然な和訓があると指摘している。したがって、「色葉字集」の右傍訓のすべてが定訓であるかどうかについては、まだ検討する余地がある。

本稿は以上を踏まえ、「色葉字集」より約70年遅れて刊行され、版本が多く当代に流布した「いろは韻」の一種である『広益以呂波雑韻刊誤』を取り上げ、それをもとに定訓論を再検討しようとするものである。また、量的調査の資料として、室町時代の代表的な漢字辞書『倭玉篇』を使用し、質的調査の資料として、『落葉集』『色葉字集』と同様に、キリシタン版辞書である『日葡辞書』を使用する。

2. 両資料を比較する意義

『落葉集』の「色葉字集」は文字通り、和訓の頭文字をいろは順で分類し、各部内で単漢字と熟字訓を併載する部分である。土井(1971:134)によると、「色葉字集」の単漢字は漢字の部首に拠り、同一部首に属する漢字をまとめて並べるといふ。白井・陳(2024)はさらに、「色葉字集」における掲載漢字が部首でゆるやかにまとまっていることは、編集に先立って漢字辞書から漢字と和訓を採取したためだろうと「色葉字集」と漢字辞書の関わりを指摘している。また、同書は『色葉字類抄』のように同訓異字を一箇所にまとめていない特徴もあるため、同一部首であるため結果的に意味が類似する漢字が近くに類聚されたと推測される。

同じく近世初頭に成立した辞書の中で、いろは引きかつ単漢字掲出の辞書群「いろは韻」は、意味分類を施し、基本的に掲載漢字の左側に一つの傍訓を付け、多訓字の場合には字下に註訓を掲載するなどの特徴を持っている。これらの特徴は「色葉字集」に似ており、特に漢字の傍訓が基本的に一つしか付けられない点から、その傍訓が当時の常用性の高い和訓、すなわち定訓である可能性があると考えられる。

「いろは韻」掲載和訓の常用性について、鈴木(2016)は「いろは韻」系辞書の中で、「雷本」「乾本」「潼本」といった三分類のそれぞれ初期の一本を『聚分韻略』と比較した結果、三本ともに9割前後の割合で先行辞書『聚分韻略』の和訓と一致する一方、それぞれに特徴的掲出字と和訓を持っていることを明らかにし、

² この表記の仕方は筆者によるもの。「1:1」とは漢字と和訓の数が一つずつで、1対1で対応していることを表す。

³ 「和訓→漢字」方向では、和訓から想起される漢字は1つであっても、漢字から想起される字訓は1つでないこと、つまり多訓字のこと。「漢字→和訓」方向では、漢字から想起される和訓は1つであっても、和訓から想起される漢字は1つでないこと、つまり同訓異字のこと。

「それはイロハ順平仄分類体韻書の一般的採録字の範囲や、和訓に於けるいわゆる「定訓」を示したことになる」と指摘し、「いろは韻」から和訓の「定訓」を検討する可能性と価値を示した。

なお、「色葉字集」と「いろは韻」についての研究として、白井・中尾（2021）が挙げられる。白井・中尾（2021）は「いろは韻」系辞書の中で、「乾本」分類の増補が見られる後発辞書『広益以呂波雑韻刊誤』を取り上げ、「色葉字集」と比較し、両書の一致する漢字が多いことを明らかにした。しかし、「色葉字集」で語頭「い」の定訓をもち『広益以呂波雑韻刊誤』の「以」部にない漢字は「寵感修郭蛟鰯」の6字があり、それはこれらの和訓と漢字の結びつきが弱いためであることもあわせて指摘されている。

したがって、本稿では白井・中尾（2021）の研究を踏まえ、「いろは韻」系辞書の中でも比較的后発の辞書である『広益以呂波雑韻刊誤』を取り上げ、より広い範囲で「色葉字集」と比較し、「色葉字集」における和訓の性質を探りながら、定訓論を再検討していきたい。

3. 調査対象および本稿の立場

本稿は寛文10年（1670年）刊『広益以呂波雑韻刊誤』（以下『広益』と略す）を調査資料とし、同書の「以（い）」から「遠（を）」まで12部の合計6081項目の掲載漢字と和訓を具体的な比較対象とする。本来ならば、筆者は原本に掲載された情報を正確かつ効率的に使用し、計量的に分析できるように全文データベース化したいと考えていたが、全文を短時間で入力するのは現時点で困難である。そのため、現時点で入力済みの「遠」までの合計4803項目のデータと、筆者が二次修正した白井・中尾（2021）入力の「以」「呂」部延べ1278字のデータを合わせて、合計6081項目のデータを初期『広益』データベースとして使用することにした。

また、『落葉集』『色葉字集』（イエズス会ローマ文書館蔵）のデータベースは広島大学日本語研究会が公開したもの⁴を使用する。具体的な分析については、「色葉字集」に掲載された「い」から「を」まで12部の合計483項目のデータを使用する。

白井・中尾（2021）が指摘したように、『広益』は桁違いの漢字数を持つ以上、「色葉字集」と一致する漢字が多いのは当然なことであり、逆に「色葉字集」にあって『広益』にない漢字が存在するのは、それらの和訓と漢字の結びつきが弱いためである。白井・中尾（2021）の調査は「以」部に限られるが、調査範囲を「遠」部まで広げても両書の一致する漢字が多いことは変わらないと予想される。そして、「色葉字集」にあって『広益』にない漢字はそれほど多くなく、それらは同時代の『倭玉篇』のような漢和辞書由来の可能性が高いというのが本稿の立場である。

⁴ 広島大学日本語研究会のサイトで公開されている。
<https://home.hiroshima-u.ac.jp/jshira/kojisyo.html>

4. 量的調査と考察

4.1 掲載漢字の一致率

「色葉字集」の「い」から「を」まで12部の延べ483漢字とその掲載和訓を、『広益』と比較した結果⁵は以下表1の通りである。

表1 「色葉字集」と『広益』の掲載漢字と和訓の実態（仮名遣いなどの相違を除く）

共通漢字			漢字不一致
傍訓一致	字下註訓一致	和訓不一致	
351 (85%)	24 (6%)	36 (9%)	72
計411字			計72字

以下、用語の混乱を防ぐため、両書の一致する漢字を「共通漢字」と言い換え、共通漢字の和訓が不一致の場合は「和訓不一致」と表記する。

表1から分かるように、両書の共通漢字が411字で、「色葉字集」の掲載漢字の約85%を占めているため、一致する漢字が多いことは予想通りであると言える。また、共通漢字の掲載和訓において、和訓不一致の漢字が36字あり、これは共通漢字の全体の約9%でやや低い比率を占めているため、両書の共通漢字の傍訓（および「色葉字集」の字下注訓）は高い比率で一致していると言えよう。しかし、『広益』は「色葉字集」と異なり、漢字の重出率が高いので、傍訓が2個以上ある場合も少なくない点に注意すべきである。これは、両書の編纂目的と掲載方針が異なるためである。

ここでは、両書の編纂目的と掲載方針を簡単に述べる。『広益』は漢詩作成用の韻書であり、掲載されている漢字の膨大な量から見れば、押韻に使える漢字をできるだけ多く網羅し、同じ漢字を何度も掲載することが少なくない。また、多訓字の場合、意味合いによって異なる部や部門に配属される。その一方、岸本・白井編（2022:49）が述べたように、『落葉集』は外国人宣教師向けの実用的な辞書であり、日本語の学習と実践に必要となる重要な情報を優先的に掲載するため、漢字と和訓の関係を定訓により整理した辞書である。

したがって、編纂目的と掲載方針が全く異なる両書に8割以上の共通漢字があり、そして共通漢字において傍訓が一致する漢字が8割以上あることは、それらの傍訓が当時多く使われていた和訓である可能性が高い。このことを、次節で検証する。

4.2 五本『倭玉篇』からみた両書の「傍訓一致」

『倭玉篇』は室町時代に現れた単漢字の部首立て漢字辞書であり、同時代では広

⁵ 本稿で扱う漢字の掲載和訓は筆者によって現代仮名遣いに修正したものであり、和訓の比較にあたっては仮名遣いや活用などの相違はすべて同一とみなし、漢字の語形は「色葉字集」掲載の語形を優先して示した。

く流布した。川瀬（1986）は、『倭玉篇』の諸本を形式や体裁上の違いによって八種の類本に分け、その中で第四類本と呼ばれる一類が最も多く伝写されていることから、第四類本が室町時代の『倭玉篇』の流布本であると指摘した。本研究で扱う資料について、類本ごとに以下の概略を示す。

- 第一類本 「玉篇要略集」（大東急記念文庫蔵大永四年写玉篇要略集）
- 第二類本 「弘治二年本」（大東急記念文庫蔵弘治二年本）
- 第三類本 「拾篇目集」（国立国会図書館蔵拾篇目集）
- 第四類本 イ 「米沢本」（米沢市立図書館蔵本）
ロ 「玉篇略」（大東急記念文庫蔵享禄五年写玉篇略）

さらに、高橋ら（2024）は、それに基づき、『倭玉篇』の内実である和訓に重点を置き、第一類から第四類を網羅する代表的な五本『倭玉篇』を取り上げ、それぞれの掲載和訓を調査した。その結果に基づき、五本『倭玉篇』をさらに、

- I 型 「玉篇要略集」と「拾篇目集」
- II 型 「米沢本」と「玉篇略」
- III 型 「弘治二年本」

に分類した。それぞれの分類に属する諸本の編纂過程に使用された資料には大異があり、これが『倭玉篇』各資料の個性形成に影響を与えたことを指摘している。

本研究では、高橋ら（2024）の分類を参考に、代表的な五本『倭玉篇』⁶を取り上げ、『広益』と「色葉字集」の共通漢字について、両書の「傍訓一致」を本節（4.2）で、両書の「傍訓不一致」を4.4で論じ、それぞれの五本『倭玉篇』における掲載和訓を確認した。さらに、『広益』と「色葉字集」の傍訓が五本『倭玉篇』とどの程度一致しているかをも調査した。

4.2.1 「傍訓一致」の掲載状況

本項では、表1の中で「色葉字集」と『広益』の共通漢字における「傍訓一致」について、両書で一致する傍訓が当時代によく使用されていた和訓なのか、それとも国語辞書としての「色葉字集」と漢詩押韻用韻書である『広益』だけに通用する和訓なのかを、室町時代の代表的な漢字辞書『倭玉篇』の5つの資料で確認することにした。

調査方法として、まず、両書の共通漢字における「和訓不一致」の数を36件に揃えるため、「傍訓一致」の351字の中からランダムに36字を抽出し、当該36字につ

⁶ 北恭昭編（1994）『倭玉篇五本和訓集成本文篇・索引篇』を用いて調査した。

いて五本『倭玉篇』における掲載の有無を確認した。その後、五本『倭玉篇』における各標出漢字に付されている全ての和訓を整理し、最も一致する数の多い和訓を特定した。さらに、五本『倭玉篇』内部で一致する数の最も多い和訓を『倭玉篇』を代表する和訓とみなし、「色葉字集」の傍訓および『広益』の傍訓と一致するかどうかを確認した。

調査結果は以下の通りで、五本『倭玉篇』の代表的な和訓は、36字のうち34字、つまりほぼすべてが「色葉字集」傍訓及び『広益』傍訓と一致する。なお、五本『倭玉篇』において、当該標出漢字にその和訓が施されている諸本の数で「標出字（和訓）＋数」の形で示した。

標出字（和訓）

傷（いたむ）4	機（はたもの）4	俄（にわか）1
警（いましむ）4	葬（ほうむる）3	似（にたり）3
勢（いきおい）3	鳩（はと）2	庭（にわ）3
佛（ほとけ）4	坊（ちまた）2	驕（おごる）3
洞（ほら）5	布（ぬの）5	原（はら）5
干（ほす）3	主（ぬし）4	端（はし）4
謙（へりくだる）4	抽（ぬきんず）1	鎮（とこしなえ）3
通（とおる）3	推（おす）1	滞（とどこおる）4
辰（とき）4	泳（およぐ）4	富（とみ）2
調（ととのう）2	溺（おぼる）1	脉（ちすじ）2
鏤（ちりばむ）4	夫（おとこ）3	
近（ちかし）5	儼（おごそか）1	

両書の共通漢字における「傍訓一致」について、五本『倭玉篇』内部の代表的な和訓と一致しない漢字は、「減」の一字のみである。この漢字について、両書の共通傍訓が「へらす」であるのに対し、五本『倭玉篇』では、和訓「おこる」が4本とも掲載され、常用和訓に差異が見られた。また、五本『倭玉篇』に収録されていない漢字は「隔」という一字であり、「色葉字集」と『広益』の共通傍訓として「へだつ」が記載されている。

したがって、「色葉字集」と『広益』の両書の共通漢字における「傍訓一致」を五本『倭玉篇』で確認したところ、当該漢字の傍訓は基本的に五本『倭玉篇』内部で最も一致する数の多い和訓と一致したため、「色葉字集」と『広益』の共通漢字で傍訓も一致する場合、その和訓が当代によく使用されていた和訓、つまり定訓と言って良いと考えられる。

4.2.2 五本『倭玉篇』各資料の相違から見た「傍訓一致」

前項の調査結果から、両書の共通漢字における「傍訓一致」は基本的に五本『倭玉篇』の代表的な和訓と一致することが確認できた。本項では、さらに一步を踏み込み、「傍訓一致」の36字がそれぞれ五本『倭玉篇』の各資料での掲出状況を確認し、内部での相違を以下の表2にまとめた。

表2 五本『倭玉篇』の各資料における「傍訓一致」の漢字と和訓の掲載状況

		Ⅰ型		Ⅱ型		Ⅲ型
		玉篇 要略集	拾篇目集	米沢本	玉篇略	弘治 二年本
漢字	掲載あり	21	21	25	26	21
	一致率	58%	58%	69%	72%	58%
和訓	傍訓一致	20	20	25	23	21
	総数	33	84	79	85	64
傍訓一致/和訓総数		61%	24%	32%	27%	33%
傍訓一致/漢字数		95%	95%	100%	88%	100%

全体として、「色葉字集」と『広益』両書の「傍訓一致」の漢字は、五本『倭玉篇』の各資料と高い一致率を持っている。特に、Ⅱ型の「米沢本」と「玉篇略」二本は、「傍訓一致」の36字との一致率が最も高く、約7割に達している。また、両書の共通傍訓と一致する和訓の数も最多であり、特に「米沢本」と「弘治二年本」の掲載和訓は両書の傍訓と100%の一致率を示している。つまり、この二本は、当該漢字が掲出される限り、100%の比率で掲載和訓の中に両書の共通傍訓が含まれている。

そして、調査した36件の漢字と傍訓は、どちらも流布本とされている第四類本『倭玉篇』（高橋らの分類法ではⅡ型と呼ばれる）、特に「米沢本」と高い一致率を示していることから、「色葉字集」は諸本の中で、「米沢本」とより近い関係にあると考えられる。

また、Ⅰ型の「玉篇要略集」と「拾篇目集」二本は、「傍訓一致」の漢字との一致率がⅡ型より低く、約6割に留まる。しかし、「玉篇要略集」については特筆すべき点がある。「傍訓一致」の36字のうち21字のみが当該資料に掲載されているが、にもかかわらず傍訓と一致する和訓が和訓総数の6割以上を占めているのは、「玉篇要略集」の数少ない和訓が「色葉字集」の傍訓と特異的に一致することを意味しており、「色葉字集」の傍訓の選択に関わっている可能性がある。「玉篇要略集」など特定の『倭玉篇』伝本と『落葉集』の関係は、今後も引き続き検討されるべき課題である。

4.3 共通漢字の和訓不一致について

前節では、「色葉字集」と『広益以呂波雑韻刊誤』両書の共通漢字の「和訓一致」をランダムに36字を抽出し、五本『倭玉篇』での掲載状況を確認した結果、当該資料との一致率が非常に高いことを確認した。これにより、表1の「和訓一致」351字に付されている和訓は、まさにその漢字の定訓である可能性が極めて高いことが判明した。

本節では、両書の共通漢字の中で和訓が一致しない漢字、つまり表1「和訓不一致」の36字を検討する。

まず、それぞれの掲載和訓を表3にまとめた。

表3 和訓不一致の共通漢字

	漢字	『広益』左音注	「色葉」傍訓	「色葉」字下註訓
1	憤	いかる	いきどほり	
2	出※	しゆつ	いづる	いち・あらず
3	遑	いそがはし	いとまあき	
4	寝	をとのごもる	いぬる	あな・やむ・やうやく
5	猪	いのこ	いのしゝ	
6	呪※	しゆく	いのる	
7	祝※	しゆく・はうり・をくる	いはふ	
8	療	いゆる	いやす	つくろふ・おさむ
9	契※	いたづがはし・へだる? ⁷ ・せつ	ちぎる	
10	科	ほど	とが	のり・しな
11	講	をくりな	とく	かなふ・ならふ
12	季	をとゝ	とし	すゑ・とき・をハリ
13	制	いなぶる・はかる	とゞむ	たつ・ことはる・せむ
14	寅※	いん	とら	
15	囚	とりこ・とらはれ	とらはれびと	めしうと
16	擒	とりひろぐ	とりこ	
17	屑	いさきよし	とりゑ	すりくづ・ものゝかず
18	毒	いたむ・とかき	にがし	
19	盜	ぬすびと	ぬすむ	
20	塗※	どろ・た	ぬる	
21	化	ばけもの・をもかげ	ばくる	やすし・めぐみ・をしゆ
22	勲	いさをし	はげむ	しはぎ
23	果	はんべる	はたす	
24	英	はな	はなぶさ	
25	幕	とぼり・をゝう	はる	
26	羈	をもづら	ほだす	たび・おもがひ
27	欲	ほしゝ・をもふ	ほつする	
28	彫	ちりばむ	ほる	ゑる
29	行	はしる・をとこす	をこなふ	ゆく・ありく・てだて

⁷ 汚れがあるため、判別できない。

30	士	をつと	をとこ	
31	威	いきとをり・をづ	をどす	いきほひ・くらゐ
32	棘	いばら	をどろ	からたち
33	狼	をゝかみ	をほかめ	やまいぬ
34	概	とかき	をほむね	
35	織※	しよく	をる	
36	懺	をどろく	はづ	くふる

『広益』掲出字の左傍に訓ではなく、音が付された漢字に※をつけ、『広益』での掲載状況を再確認した結果、※の付いた「出呪祝契寅塗織」の7字は全部多音字であり、二つの韻目と漢字音を有する漢字であることが分かった⁸。

このような多音字の場合、和訓は字下に配置されており、以下図1から図6の通りである。



図1 (15ウー仄3)



図2 (6ウー仄5)

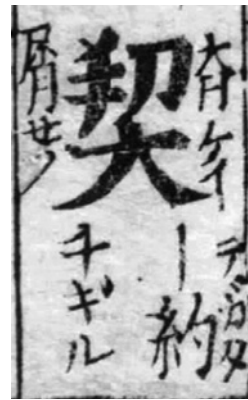


図3 (57ウー仄6)

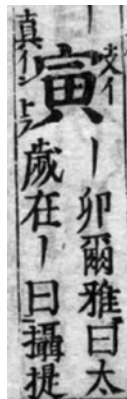


図4 (46ウー平2)



図5 (又60オー平3)

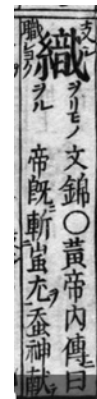


図6 (74オー仄3)

⁸ さらに、それらの漢字音の掲載を『広韻』で確認できることから、『広益』は韻書として漢字音をより正確に掲載する傾向が見られる。本稿は和訓を中心とする研究であり字音については割愛する。

和訓と関連する情報を以下の通りにまとめた。

- 2出 字下註訓「イダス ー入 イヅル」
- 6呪 「祝」の異体字であり、「祝」の字下註に「祭ー イノル イヲウ」と掲載
- 7祝 字下註訓「祭ー イノル イヲウ」
- 9契 字下註訓「テガタ ー約 チギル」
- 14寅 左傍第2訓に「トラ」
- 20塗 字下註訓「一飾 ヌル」
- 35織 字下註訓「ヲリモノ ヲル」

漢字音が二つあるため、和訓が仕方なく字下に配置されたことは理解できる。その場合、字下注訓はおそらく傍訓と同じ機能を持っていると考えやすい⁹。

この7字を「色葉字集」で確認した結果、下線を引いた和訓は「色葉字集」の傍訓と一致しているが、「呪」や「祝」のような和訓がやや不明瞭な漢字もあるので、以下の調査はこの7字を含めて行うことにした。

4.4 五本『倭玉篇』からみた両書の「和訓不一致」

4.4.1 両書傍訓の掲載状況

「色葉字集」と『広益以呂波雑韻勘誤』における掲出字の傍訓の特徴と性質を探るために、本節では「和訓不一致」の36字について、4.2と同様に五本『倭玉篇』を調査し、それらの漢字に付された和訓を確認した。

調査方法として、4.2と同じく、まず五本『倭玉篇』での掲載有無を確認し、五本『倭玉篇』内部で一致する数の最も高い和訓を代表的な和訓として、「色葉字集」と『広益』それぞれの傍訓と一致するかどうかを確認し、以下表4にまとめた。

表4 五本『倭玉篇』と両書傍訓の一致状況

	漢字（和訓）	計
両書の傍訓と一致	出（いづる）、契（ちぎる）、寅（とら）、塗（ぬる）、織（おる）	5 (13.8%)
「色葉」の傍訓と一致	憤（いきどおり）、寝（いねる）、猪（いのしし）、科（とが）、講（とく）、季（とし）、制（とどむ）、毒（にがし）、盗（ぬすむ）、果（はたす）、英（はなぶさ）、羈（ほたす）、行（おこなう）、士（おとこ）、威（おどす）、棘（おどろ）、概（おおむね）	17 (47.2%)
『広益』の傍訓と一致	祝（おくる・はうり）、狼（おおかみ）	2 (5.6%)
両書の傍訓と不一致	遑（いとまあき）、擒（とりこ）、化（ばくる）、療（いやす）、囚（とらわれびと）、屑（とりえ）、欲（ほっする）	7 (19.4%)
漢字掲載なし	呪、勲、幕、彫、懺	5 (13.9%)

⁹ これは『広益』が韻書としての性格が強いことを反映しており、今後の課題として引き続き検討していく予定である。

「色葉字集」と『広益』の両方の傍訓とも一致する漢字は表4の「両書の傍訓と一致」に示されている5字であり、これは前節で示した『広益』の7件の多音字のうち5件に該当する。『広益』の字下注訓が「色葉字集」の傍訓と、また五本『倭玉篇』の代表的な和訓と一致していることから、『広益』の多音字の字下注訓が高い確率で傍訓と同じ機能を持つことが確認できた。

また、五本『倭玉篇』を代表する和訓は、「色葉字集」の傍訓のみと一致する漢字は表4の「「色葉」の傍訓と一致」に示されている17字であり、その一致率は最も高く47.2%に達している。一方、『広益』の傍訓のみと一致する漢字は「『広益』の傍訓と一致」の2字であり、一致率は最も低く5.6%にとどまっている。これらの結果から、『広益』よりも「色葉字集」のほうが五本『倭玉篇』の掲載和訓に近いことが窺える。

なお、両書の傍訓と不一致の漢字は、表4の「両書の傍訓と不一致」に示すように7字であり、さらに五本『倭玉篇』に掲載されていない漢字は「漢字掲載なし」の5字である。

4.4.2 五本『倭玉篇』各資料の相違から見た「色葉字集」

前項での一致率の分析結果に基づき、『広益』よりも「色葉字集」傍訓の方が五本『倭玉篇』における共通する掲載和訓に近い可能性が示唆された。本節では、この点を踏まえ、五本『倭玉篇』の違いに注目し、「和訓不一致」の36字について、各資料における当該漢字の掲載有無、漢字に付された和訓と「色葉字集」傍訓との一致状況を調査した。

以下の表5では、五本『倭玉篇』各資料における漢字の掲載状況、これらの漢字と上記両書「和訓不一致」の36件の共通漢字との一致率、「色葉字集」傍訓と一致する和訓の数、漢字に付された和訓の総数、さらにそれらの一致する和訓が当該資料の和訓総数に占める比率、そして「色葉字集」傍訓と一致する比率について順を追って示している。また、分類法は高橋ら（2024）を参照したものである。

表5 五本『倭玉篇』各資料における「和訓不一致」の漢字および「色葉字集」傍訓の掲載状況

		I 型		II 型		III 型
		玉篇 要略集	拾篇目集	米沢本	玉篇略	弘治 二年本
漢字	掲載あり	16	16	20	21	14
	一致率	44%	44%	56%	58%	39%
和訓	「色葉」傍訓一致	11	10	20	16	10
	総数	22	59	68	75	46
傍訓一致/和訓総数		50%	17%	29%	21%	22%
傍訓一致/漢字数		69%	63%	100%	76%	71%

全体として、Ⅱ型の「米沢本」と「玉篇略」二本は、「和訓不一致」の36字との一致率が最も高く約6割に達している。また、「色葉字集」傍訓と一致する和訓の数も最多であり、特に「米沢本」の掲載和訓は「色葉字集」傍訓と100%の一致率を示している。つまり、研究範囲において、「米沢本」と「色葉字集」の共通漢字には、絶対的に「色葉字集」の傍訓が付されている。これは4.2.2の「和訓一致」の調査結果と一致しており、調査範囲内において、「色葉字集」の傍訓はすべて『倭玉篇』の流布本である「米沢本」に掲載されている。

「米沢本」の掲載和訓の総数が多いことも影響しているが、和訓総数が「米沢本」よりも多い「玉篇略」では同じ一致率を示していないことから、「色葉字集」は五本『倭玉篇』のうち、従来の川瀬（1986）の分類法における第四類本、高橋ら（2024）の分類法におけるⅡ型に所属する「米沢本」と近い関係にあると考えられる。

鈴木（2017）は、『落葉集』「小玉篇」の独自和訓が第四類本『倭玉篇』及びその改編本である「円乗本」と9割の対応率を持ち、関連性が高いと指摘したが、実際には「色葉字集」も同様の傾向を示しており、「色葉字集」の独自和訓も第四類本、特に「米沢本」との一致率が高い。

また、Ⅰ型の「玉篇要略集」と「拾篇目集」二本は、「和訓不一致」の漢字との一致率がやや低く、約4割を占めている。そのうち、「玉篇要略集」では「和訓不一致」の36字のうち、16字のみが掲載されており、掲載和訓と「色葉字集」傍訓との一致率は特に際立っていないが、傍訓と一致する和訓が当該資料の和訓総数の50%を占めることが目立ち、この点についても4.2.2の調査と同じような傾向が見える。

つまり、「玉篇要略集」に掲載された漢字と和訓の結びつきは、「色葉字集」の漢字と傍訓に似た構造を持っている可能性があると考えられる。

5. 質的調査と考察

4.4では「色葉字集」と『広益』の共通漢字における「和訓不一致」の36字を取り上げ五本『倭玉篇』と比較した。その結果、五本内部で最も代表的な和訓がそれぞれ「色葉字集」傍訓と17件が一致しており、『広益』傍訓と2件が一致していることが表4の通り示された。したがって、両書の「和訓不一致」において、「色葉字集」傍訓の方が室町時代の代表的な漢字辞書『倭玉篇』と近い関係にあることが確認できた。

しかし、『広益』傍訓と一致しており、「色葉字集」傍訓と一致しない2件、両書の傍訓と不一致の7件、それに『倭玉篇』に掲載されていない5件については、「色葉字集」掲出字の傍訓の掲載方針に関わっており、「色葉字集」における漢字の傍訓が定訓であるかどうかにも深く関係しているので、さらなる調査が必要である。

中野（2018）は、山田（1971）の定訓論をもとに、キリシタン版『日葡辞書』（1603-04年）の訓釈¹⁰を『落葉集』と比較した結果、『日葡辞書』の訓釈に用いられる字訓は、基本的に『落葉集』「小玉篇」の定訓（左傍第一位訓）と一致していることを明らかにした。また、これらの定訓が漢字表記を喚起するのに最も適した字訓であることを、その原因として指摘している。

そのため、同じくキリシタン版の辞書である『日葡辞書』を調査資料とし、便宜上、土井編（1980）の『邦訳日葡辞書』を利用することにした。調査において、「和訓不一致」の36字の中で、『広益』傍訓と一致しているが「色葉字集」傍訓とは一致しない2件、両書の傍訓と不一致な7件、さらに『倭玉篇』に漢字が掲載されていない5件の合計14件に関する「色葉字集」傍訓について、『日葡辞書』の訓釈との一致状況を調査した。

(1) 祝【いわう】

Xucunichi（祝日） Iuaino fi.（祝の日）

(2) 狼【おおかめ】

Corô.（虎狼） Tora, Vôcame.（虎と狼）

Zairô.（豺狼） Vôcame.（狼）

(3) 化【ばくる】

Ningue.（人化） Fitoni baquru.（人に化くる）

(4) 療【いやす】

Reôgi.（療治） Iyaxi,su.（療し,す）

(5) 勲【はげむ】

Cuncô.（勲功） Côuo faguemasu.（功を勲ます）

(6) 懺【はづる】

Sangue.（懺悔） Fagi cuyamu.（懺ぢ悔やむ）

以上の6例は、「色葉字集」傍訓が『日葡辞書』の訓釈に掲載され、比較的に安定している和訓であると考えられる。つまり、これらの和訓は、近世に流行していた韻書『広益以呂波雑韻刊誤』の傍訓とは異なり、室町時代の代表的な漢字辞書である五本『倭玉篇』の有力な和訓とも異なっているが、キリシタン版においては、当該漢字と非常に強い結びつきのある和訓であると言えよう。例（4）の訓釈は漢字1文字分しかないようだが、「治」に対応する和訓が含まれないと判断した。

続いて「色葉字集」傍訓と『日葡辞書』訓釈が一致しない例を挙げる。

¹⁰ 中野（2018）によると、訓釈とは見出し語の漢字表記喚起に資する注記である。

(7) 彫【ほる】

Cocuchô. l, cocugiô. (刻彫)

Qizami yeru. (刻み彫る)

Cocugiô. (刻彫)

Yeri qizamu. (彫り刻む)

(8) 呪【いのる】

Xuso. (呪詛)

Norô. (呪ふ)

(9) 屑【とりえ】

Qinxet. (金屑)

Coganeno suricuzzu. (金の屑)

(10) 幕【はる】

Bacca. (幕下)

Macuno xita. (幕の下)

例(7)について、『日葡辞書』の見出し語“cocuchô”または“cocugiô”の漢字表記は「刻彫」だと推定される。この“chô”または“giô”（彫）に対応する訓釈は“yeru”（える）であって「ほる」ではない。但し、「色葉字集」には定訓として「ゑる」も掲載されているので全く一致しないわけではない。「彫」は多訓字であり、「ほる」「ゑる」は共に定訓としての性格を備えてはいるものの、訓釈においては「ほる」が優先されたとみることができる。「刻彫」では訓釈の順序が逆転しているが、漢字と和訓の対応が混乱したわけではないだろう。

例(8)では、「呪」に「いのる」が定訓として対応する。しかし『日葡辞書』では「呪詛」の見出し語に対して“i, Norô”（すなわち、呪ふ）としており、「いのる」を用いた訓釈ではなく対応しない¹¹。また、「すなわち、呪ふ」は訓釈ではなく同義の語で置き換える置換語釈とみられることから、和訓による訓釈が難しいという判断があったとみられる。

例(14)では、『日葡辞書』において、漢字「幕」と和訓「Macu. (まく)」との結びつきが強く、漢語に登場する場合でも「まく」で訓釈され、「色葉字集」の傍訓である「はる」との結びつきが確認できなかった。

見出し	訓釈
Gunmacu. (軍幕)	なし
Imacu. (帷幕)	なし
Vômacu. (大幕)	なし

この他の4例は、『日葡辞書』の訓釈には全く現れない。

¹¹ 「色葉字集」において「いのる」は「祈」の定訓でもある。『日葡辞書』においても“Qixei”（祈誓）に対して“Inori chicô”（祈り、誓ふ）の訓釈が現れるように、「祈」との結びつきの方が強いとみられる。

- (11) 遑【いとまあき】
- (12) 擒【とりこ】
- (13) 欲【ほっする】
- (14) 囚【とらわれびと】

例（13）では、漢字「欲」が漢語に現れる場合、字音語「よく」または「むさぼる」「このむ」で訓釈されており、「色葉字集」傍訓の「ほっする」は『日葡辞書』の訓釈では確認できない。以下は「欲」を含む見出し語のすべてと、それに対応する訓釈である。

見出し	訓釈
Aiyoqu. (愛欲)	なし
Dôyocu. (胴欲)	なし
Goyocu. (五欲)	Itçutçuno yocu. (いつつの <u>よく</u>)
Giŷyocu. (重欲)	Vomoqi yocu. (おもき <u>よく</u>)
Inyocu. (淫欲)	なし
Muyocu. (無欲)	Yocu naxi. (<u>よく</u> なし)
Riyocu. (利欲)	なし
Rocuyocu. (六欲)	Mutçuno yocu. (むつの <u>よく</u>)
Tonyocu. (食欲)	なし
Xiqiyocu. (色欲)	Irouo musaboru. (いろを <u>むさぼる</u>)
Xiyoqu. (嗜欲)	なし
Yocunen. (欲念)	なし
Yocutocu. (欲徳)	なし
Yocuxin. (欲心)	なし
Zaiyocu. (財欲)	Tacarauo conomu. (たからを <u>このむ</u>)

このような字音語「よく」を用いた訓釈について、中野（2018）はこれを定訓以外の訓釈と判断し、「一字字音語による訓釈」¹²として分類した。

このように、『広益』傍訓や五本『倭玉篇』の有力な和訓とは異なる「色葉字集」の傍訓は『日葡辞書』訓釈と一致しない例が多い。中野（2021:74）によれば『日葡辞書』見出し語の訓釈の94.6%は『落葉集』定訓を用いるという。ここで検討した14例のうち8例がこの原則から外れるのは、「色葉字集」の定訓が必ずしも有力な和訓ではなかったことの証拠となるだろう。

¹² 中野（2018）によると、『日葡辞書』の訓釈において一字字音語が採用される漢字種は186字種あり、漢字「欲」は「同定訓異字無」に分類されている。

しかし、逆にみれば、日本側の古辞書との比較では定訓であることが十分に確認できない6例を訓釈に用いた点は注目に値する。この特徴は、同じキリシタン版として『落葉集』と『日葡辞書』の間にある密接な関係に由来しており、日本側の古辞書のみに基づいて定訓を考えることの限界を示すものだからである。

6. まとめ

本論は、漢字と最も強く結びつく和訓、すなわち定訓の視点から、『落葉集』所載の国語辞書「色葉字集」を取り上げ、「いろは韻」の韻書『広益以呂波雑韻刊誤』と比較した結果、「色葉字集」は従来定訓を検討する際に使用してきた『落葉集』所載の漢和辞書「小玉篇」と同じく、意識的に漢字を絞り込み、定訓を優先する意図が見られることを確認した。

比較に際して、「色葉字集」と『広益』の共通漢字に関する調査を行った結果、8割以上の傍訓が一致しており、36字（約1割）の傍訓が一致しなかった。この調査結果を基に、「傍訓一致」と「傍訓不一致」をそれぞれ36字抽出し、室町時代に流布した部首分類体の漢和辞書『倭玉篇』で確認したところ、「色葉字集」の傍訓が五本『倭玉篇』の最も代表的な和訓と一致する部分がかなり多いことが明らかになった。「色葉字集」が各部内で更に部首によって漢字を排列する傾向からみても、編纂段階において『倭玉篇』の影響を受けた可能性が認められる。

一方、「傍訓不一致」の36例のうち、『広益』の傍訓は五本『倭玉篇』の最も代表的な和訓とほぼ一致しなかった。『広益』は「色葉字集」のような部首排列ではなく、意味によって漢字を排列する傾向が認められるので、そうした点からも『倭玉篇』との関連は希薄である。このように、同じく和訓から漢字を検索するいろは引きの辞書であっても、情報に相違があり、参照された資料も異なることが示唆された。

注意すべきは、調査に使用した五本『倭玉篇』の中で、「色葉字集」傍訓は川瀬（1986）の分類法による第四類本（高橋の分類法ではⅡ型）、特に「米沢本」に掲載されている和訓と非常に高い一致率を示している点である。これは、鈴木（2017）が指摘した「小玉篇」の独自和訓に関する研究で見られる傾向と似ているが、第四類本の和訓の総数が多いため一致率が高くなるのは自然なことであり、単純に影響関係を考えてよいのか疑問がある。その意味では、本稿で指摘したように「玉篇要略集」の数少ない和訓が「色葉字集」の傍訓と特異的に一致していた点にこそ、「色葉字集」の傍訓選択に影響を与えている可能性を認めるべきだろう。このような特定の『倭玉篇』伝本と『落葉集』の関係は、今後の研究に新たな視点を提供するものである。

さらに、『倭玉篇』でも確認できなかった「色葉字集」の傍訓、つまり日本側の辞書では特殊な傍訓について、キリシタン版『日葡辞書』で調査したところ、「祝

「狼化療勲懺」の6例の和訓は訓釈に現れ、その他の8例は訓釈にみられなかった。このことからみて、「色葉字集」傍訓であっても定訓とはいいがたい和訓があるのは確かである。それと同時に、日本側の古辞書との比較では必ずしも定訓とはいい切れなかった和訓について、「色葉字集」傍訓と『日葡辞書』訓釈が強固に結びついていることには注意すべきである。このことは定訓研究だけでなく、『日葡辞書』の研究においても新たな視点を提供しよう。

参考資料

北恭昭編 (1994) 『倭玉篇五本和訓集成本文篇・索引篇』 汲古書院

＝日葡辞書

土井忠生・森田武・長南実 編訳 (1980) 『邦訳 日葡辞書』 岩波書店

＝『落葉集』 イエズス会ローマ文書館蔵

『落葉集』

漢字と和訓のデータベースが、広島大学日本語研究会のサイトで公開されている。

URL : <https://home.hiroshima-u.ac.jp/jshira/kojisyo.html>

『広益以呂波雑韻刊誤』 広島大学図書館蔵

国書データベースで画像が公開されている。

URL : <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100302145/381?ln=ja>

参考文献

今野真二 (2016) 「キリシタン版『落葉集』の傍訓」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』
24、pp.71-87

岸本恵実・白井純編 (2022) 『キリシタン語学入門』 八木書店

白井純・中尾祥子 (2021) 「広島大学図書館蔵「いろは韻」2種の掲載漢字と和訓について：聚分
韻略・落葉集との比較を含めて」『広島大学文学部論集』 81 号、pp.1-17

川瀬一馬 (1986) 『増訂 古辞書の研究』 雄松堂出版

鈴木功真 (2016) 「近世初期イロハ韻諸本の和訓試論—『聚分韻略』『新韻集』との対照を中心に—」
『訓点語と訓点資料』 137 輯、pp.52-66

鈴木功真 (2017) 「落葉集小玉篇の和訓に於ける第四類本倭玉篇との関係に就いて」『日本大学
国文学会』 158、pp.135-148

高橋忠彦・高橋久子 (2024) 「倭玉篇の和訓の典拠 —弘治二年本倭玉篇に於ける文選・色葉字
類抄の影響—」『日本語の研究』 20、pp.18-34

土井忠生 (1971) 『吉利支丹語学の研究 新版』 三省堂

豊島正之 (2002) 「キリシタン文献の漢字整理について」『国語と国文学』 79-11、pp.47-59

中野遙 (2018) 「キリシタン版『日葡辞書』訓釈について——『落葉集』定訓との対照を中心に——」
『上智大学国文学論集』 51、pp.19-37

山田俊雄（1971）「漢字の定訓についての試論—キリシタン版落葉集小玉篇を資料として」『成城国文学論集』4、成城大学大学院文学研究科、pp.1-256

（おう しけん、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

The Representative Wakun of Kanji in *Irohajishū* From *Rakuyōshū* : A Comparative Study with the Iroha-Ordered Rhyming Dictionary *Kōyekiirohazatsuinkango*

Ziyan WANG

Keywords: Wakun of Kanji, The Representative Wakun of Kanji, Iroha-Ordered Rhyming Dictionary, Kanji Dictionary, *Rakuyōshū*

This paper examines the representative wakun—the Japanese readings most closely associated with individual kanji, by analyzing *Irohajishū* (色葉字集) from the Kanji dictionary *Rakuyōshū* (落葉集), published by the Jesuit Mission in 1598, and compares it with the Japanese iroha-ordered rhyming dictionary *Kōyekiirohazatsuinkango* (広益以呂波雜韻刊誤).

In the *Irohajishū*, the kanji are arranged according to their wakun, and only those kanji that were commonly used during that time are selectively included. The wakun provided to the right of each kanji in *Irohajishū* are generally the representative wakun, strongly associated with the particular kanji.

Although *Irohajishū* is organized by the iroha order, most of its wakun align with those found in the *Wagokuhen* (倭玉篇), which was compiled during the Muromachi period. The characters in the *Wagokuhen* are listed based on their dominant component parts. Similarly, this feature is also evident in the *Irohajishū*, suggesting that the *Wagokuhen* may have influenced its compilation. This influence is further demonstrated in the way *Irohajishū* arranges kanji by radicals within each iroha section.

Like *Irohajishū*, *Kōyekiirohazatsuinkango* also follows the iroha order for listing kanji. However, whereas *Irohajishū* organizes kanji based on their dominant components, *Kōyekiirohazatsuinkango* arranges them by meaning. The difference highlights variations even between dictionaries that employ similar retrieval methods.

Additionally, some specialized wakun that do not appear in other Japanese dictionaries but are found in the *Irohajishū* can also be identified in the following explanation in the *Nippo Jisho* (日葡辞書), a Japanese-Portuguese dictionary compiled by the Jesuit Missionaries in Nagasaki in 1602. The overlap offers new insights and complementary perspectives for research on the *Nippo Jisho*.